



農村活性化シンポジウム

女性の輝きによる

魅力ある農業と農村地域づくり

北海道開発局では、女性が地域農業の振興や6次産業化の展開に重要な役割を担っている現状を踏まえ、「生産空間」としての農村地域の活性化における女性の役割の重要性について認識を深めていただくため、「女性の輝きによる魅力ある農業と農村地域づくり」をテーマに、北海道農政事務所との共催によりシンポジウムを開催しました。

福岡市で九州一円の農産物を扱う直売所「ぶどう畑」を営む新開玉子氏と、慶應義塾大学大学院の林美香子教授の二人に女性の視点や感性を活かす優位性などについて講演いただきました。

【講演1】「心を耕す農業」を目指して、女性の思いを農業・農村に

新開 玉子氏

有限会社ぶどう畑代表取締役

「騙され婚」から始まった農業への思い

12月17日は私の誕生日です。今年で73歳になります。この歳まで元気で農業をやってこれたことは本当に幸せだと思っていますが、私たちの年齢、70過ぎはみんな昔、騙されて結婚したんですね。やりたくて農業を

やったという人はほとんどいなくて、「農家に嫁いだのでやむを得ず」という人が多いのです。私も、本当に自分で農業をやるうと思うようになるにはとても時間がかかりました。

結婚当初はまだ田植えでさえも手植えで、人力と牛馬の力を借りての農業でしたから、経済成長がどんどん進む一方で農業をやる人は年々減るばかり。そ

んな中、騙された仲間で作ったグループ『みな月会』です。と考えていたことは「農家の嫁が、何をしたらお金と自由を手に入れることができるだろうか」ということでした。そして12年半、待つて待つて積み重ねた結果、やっと1999年7月に「ぶどう畑」という店を誕生させたのです。ですから、私は若い人によく言うのです。「心と技とお金を貯めたら、女性は企業を興していい」。つまり、女性が何かをするには「しつかりと、心、根性、忍耐、優しさ、思いやりを溜めて、人に負けない技術を持ってコツコツとお金を貯めなさい」ということです。

生産者主体の経営ポリシー

ぶどう畑は営業時間を11時にしています。それはなぜかというと、どんなに巨峰を朝早く

からちぎって揃えても10時ぐらいにはなるし、遠方の人は運ぶのに1時間ぐらいかかります。直売所は農家が運営する独特のものだから、消費者の言いなりではなくて生産者を主体にした店にしたかったのです。都会の人は、どんなに説明しても「これは無農薬ですか？」と何度も聞いてきます。「なんで農業ばかり、ニコニコせないかね」っていうのが心にあつて、媚びない農業も大事です。

生産者の方々が汗水垂らして作った農産物を一つ一つ最後まで売って、「ああ農業ってこんなに素晴らしい！」と思ってもらうのが私たちの目標です。今までは、農産物は商品として扱われて、命として扱われていなかった。こういう「命」のおかげで私たちは生きているのですが、商人に渡ると、いとも簡単に安く売られて、私たちの思いは



【講演者】
新開 玉子氏

福岡県筑後市生まれ。農家に嫁入りし農業に従事。これまでに農林水産省食料・農業・農村政策審議会委員などを務める。「消費者に農の心を伝えたい」との思いから、女性グループで野菜の出張販売や加工品づくりを始め、そこで培ったネットワークを活かし農産物直売所「ぶどう畑」を設立。九州各地から集まる農産物の直売や若手農業者の育成などを通じて、都市と農村の架け橋になる活動に取り組む。



どこに行ったのかしら、と思うこともある。それだけに店づくりは大事にしています。

女性の視点・感性を活かした農業経営と店づくり

ぶどう畑では30名のスタッフを雇っています。若い人、自分にしかできないものを持っている人、男性、お年寄り、いろんな人が集まってこそ農業がいろんな形に見えてくるので、スタッフは私の財産です。農家とお客様とスタッフ。この3者が互いに感謝の気持ちで一体となること、これは男性では気付かないことです。

ぶどう畑には厨房があります。九州では今、大根一本150円くらいですが、直売所というのは品物が売れずに残ってしまいます。それをこの厨房で、食べ切りサイズ（10等分）にして煮付けて、惣菜として100円程度／個で売っているのです。そのような、まだ花開いていない埋もれつつある部分を掘り起こすような技術を女性が発揮していけば農業は変わると思います。

九州大学の農学部から大学院まで出て、私と一緒に農業したいと飛び込んできた女性がいます。「農業はいかんとよ。大学院まで出て何で農業するね？」と私。でも「いいえ、絶対したいです」。最後はお母さんを連れて来て、お母さんから「この子の人生はこの子のもので、店長さんに懂れているので、そうなりたいらしいから鍛えてください」と言われました。大学院卒の娘を預かるとなると、企業ですから給料やボーナスも払わなければならぬ。それならば「この際、水耕栽培をしよう」と。それなら女でもできる、機械も使わなくていい。

夫からは「土も使わんのだったら農業するな」とも言われましたが、綺麗な野菜を近所の子供に食べ



させたいという思いがずーっとあったのと、その子が飛び込んできたのが同時期だったので、初めて6次化事業の申請をし、補助金をいただきました。そのことについては葛藤もあつたのですが、後継者を作るためになら良いのではないかと自分に言い聞かせ、自己資金と補助金を合わせてハウスを建てたのです。駐車場を挟んですぐ横にあるハウスで採れた野菜は、こんなに大事に育てているんですよ、と紹介し「わが家の畑」シートを貼って売っています。

あらゆる人材がたずさわる農業社会に

この仕事をしていて、女性で農業をやりたい人が思った以上に多いことが分かってきました。福岡市では昨年から女性をターゲットにして、これから農業をやりたい人のための勉強会を行っており、その中から選ばれた3人がぶどう畑に研修に来ています。3人とも30〜40代の女性。しかも幼稚園のママ友で、子供が幼稚園に行っている間だけ来たい。さらに、土曜日、日曜日は子供のクラブなどがあつて来られない、そういうような人が多いのです。その時はシルバー人材、70代が頑張るのです。するとこれがうまくつながつていくのですね。

農業は高齢化社会に貢献できる職業ではないか、と私はずいぶん前から思っています。こういう農業社会に変えていかないと、これから農業をやる人はいなくなっていくでしょう。

「心を耕す農業」を目指して

農業者というのは田んぼや畑を耕すだけでなく、耕しどころがもう一つあつたのです。それは「都会の人や子供の心」。食農教育や就農研修として、幼稚園、小学校、中学校、大学生と受け入れています。本当の「あま

おう」の美味しさや新米の美味しさは口で言っても分かりません。私は、「子供は胃袋で育てる」と言っています。そして、その胃袋は「お袋」が育てる。今、コンビニなどでは何でもあって、おかずと主食が袋を破れば一緒に出てくる、いわば、袋が育てている状況です。そうです、袋に「お」を付けましょう。「お袋」で育てましょう。

食農教育の一環として、幼稚園や小学校で田んぼや野菜を作らせていますが、田んぼでは、田植え、稲刈り、脱穀、昔はその後、藁でしめ縄を作って正月を祝ったということを一貫して教えないと子供たちは感動しないのです。そういう風に、農家の技術で社会貢献していつて頼られる、愛される農家になることが、農業の宣伝になるのではないかと思っています。私ももう73歳です。私の限りある時間でそうした知恵の全てを子供たちに、そして大人に伝えていきたい。

女性の輝きによる魅力ある農業と農村地域づくりに向けて

今日のシンポジウムのテーマは「女性の輝きによる魅力ある農業と農村地域づくり」ですが、

福岡市では、私たちがあんまり頑張るものだから、市長が私たち女性に市の農業のサポートをするように任命しました。やはり行政の任命や認定があると全然違うのです。行政には輝く女性を応援していただきたいですし、頑張る農家に助成して欲しい。これからは女性たちが農業をお洒落に、美しく変えていく時代が来たと思います。

日本の農業就業人口は、60歳以上が約80%の時代です。そんな危機的な時代になって男も女もない。頑張る人に支援をする社会、農業をやりたい人がやれる仕組み、女性が見えやすい、すい仕組みを作っていない限り、農業人口は増えないのではないかと思っています。

だから、私はささやかながら、女性を中心として雇っているスタートアップたちが、一人ずつ自立して50万円稼げる農業をしてもらって「お父さんの給料を当てにしないで、私がハワイに連れていくよ」という女性を育てたいと思っています。

この広大な北海道では、機械を使いながら素晴らしい農業ができると思います。女性の皆さん、是非頑張ってください。

【講演2】 女性と農村コミュニティビジネス

林 美香子氏 慶應義塾大学大学院SDM研究科特任教授
北海道大学大学院農学研究院客員教授

農村と都市の共生と農都共生

「農都共生」について、少しご紹介したいと思っています。農村と都市の共生を縮めて言う言葉が「農都共生」で、農村だけを活性化するのはなく、都市の人たちが一緒になって活性化を考えていくということがとても大切だと思っています。

日本人のアンケート調査結果をみると、一人当たりのGDPというの上がってきているのですが、生活の満足度は実は横ばいなんです。もちろんお金も大切に頑張っています。

それだけではない生活満足度というところに気持ちが変わってきている時代です。それと同時に、「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」を求める時代になっています。レジャーや余暇に力点を置きたいということですが、その三つの要素が、「温泉」、「景観」、「グルメ」なのですが、北海道にはこの三つがたくさんありますので、本当に追い風です。

また、「直売所に買い物に行く」とか「グリーンツーリズムを楽しもう」というように農業や農村との関わりを持ちたいという方も非常に増えています。このことを背景にして、農村に

農都共生 農村と都市の共生



【講演者】
林 美香子氏

札幌市生まれ。北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送株式会社にアナウンサーとして入社。退社後はキャスターに。「農村と都市の共生による地域再生」の研究で北海道大学大学院にて博士(工学)を取得。現在、北洋銀行社外取締役、北海道田園委員会会長などを努める。著書に『農村へ出かけよう』寿郎社、『農業・農村で幸せになろうよ』安曇出版などがある。

とっては地域の活性化、そして都市の人たちにとっては満足度が上昇する施策が「農都共生」だと思っています。そのときにグリーンツーリズムや、農村のコミュニティビジネスというのがすごく大きな働きをし、農家の人たちと都市の人たちがさまざまなに交流や連携や共生をすることで、まず人材の循環ができ、そして情報の循環、さらに経済の循環が起きていく。これももともと広がっていくといいなと思います。

多彩な視点による農村コミュニティビジネス

農村の活性化の中でキーワードとなるのは、やはり「地産地消」だと思います。地産地消



なぜ大切かというと、野菜などは本当に鮮度が良くて美味しい、そして運ぶ距離が短いので使うガソリンも少ないということ。環境にも優しい面があります。さらにこれは地域内の経済循環でもあるわけで、実は消費者ができる大切な地域づくりの一つです。ただ、北海道は200%に近い食料自給率ですから、地域外で販売していくということも大切です。

講演のテーマである農村のコミュニティビジネスというのは、地域にある資源や人材、ノウハウ、施設や資金を活かしながら、地域課題の解決に取り組んでいくというものです。それもボランティアなものではなくビジネスの形できちんと報酬を得ながら続けていくという視点です。また、地域に新たな産業や雇用を創出して、働きがいや生きがいを生み出し、地域コミュニティの活性化にもつながっていくもの。そういう発想で、ぜひ地域それぞれの皆さんが農村コミュニティビジネスに参加して欲しいと願っています。

農村コミュニティビジネスというと、例えば農産加工をするとか農産物の直売所、レストラン、カフェ、さまざまなものがあります。さらに「健康」とい

う点では今、北海道各地にフットパスが非常に広がっています。あるいはトレッキングやウォーキング。また「福祉」という視点では、農村におけるデイサービス。北海道でも農協がデイサービスを手掛けたり、また他府県では農業者のグループがデイサービスを始めている地域もあります。

「環境」という視点からは、植樹をしたり、アウトドアの方たちがエコツーリズムを始めた「生きがい」という点では都会の人が市民農園をするというのがありますし、また反対に農家の方たちが教えることで生きがいにつながっていく、料理教室を開いていく、さまざまな方法が考えられます。そして、農家民宿や農家レストランなどもそうですが、都会の人と農村の人が「交流」をしていくというのも農業を応援するためにとても大切だと思います。

活かすべき女性の視点や感性

農村コミュニティビジネスは、単にビジネスとして儲けるというのではなく、色々な力を発揮できるもので、主婦でもあり生活者でもある女性の視点を活かすことは大きなことです。例え

ば、大根の値段とか卵1パックの値段などは、男性はあまり関心がないのだからない場合が多いのですが、女性は日々の買い物の中でそういったことも分かっている、生活者の延長としての「経済感覚」を持っています。また、女性は、色々な人たちの意見を取り入れる「柔軟性」、子供の将来を考えていく中での「地域愛」、毎日の主婦業に代表される「継続力」、様々な方々のネットワークを通じた「連携力」があり、そういった力をビジネスに活かせるものだと思います。

求められるニーズに合ったビジネスモデル

農都共生のビジネスモデルでは、都会のニーズをきちんと知るということも重要です。中には製品を作ってから販売先を探したり、どうやって売ろうかと考えてしまったりして、上手くいかなかった例もあるので、是非都会の皆さんのニーズを上手に掴んで欲しいと思います。特に、日本人の食の嗜好という点での都会のニーズは、「健康」、「経済性」、そして「簡便化」、「安全安心」が大きなポイントになっていて、これらに合った

商品づくりが求められています。そして、「価値共創」。これは利用する側の生活者の人たちと一緒に、良い製品をつくっていくという発想ですが、農村コミュニティビジネスに取り組む際には是非覚えていて欲しいと思います。

今は、家庭で料理をせずに加工品や外食にお金を使う時代です。国内の生産額は概算で9.4兆円くらいなのですが、食品、飲食費の最終額は73.6兆円となっていて、私たちは材料費ではなく、まさに外食、そして加工品にお金を使う時代になっています。ですから、農家側としても加工品や外食の方にも力を発揮しなくてはいけない時代だと思います。

農産加工の中でも重要なものが、6次産業化や農商工連携です。これは取り組んでおられる方も大勢いらっしゃると思います。農業の高付加価値化として、例えば牛乳を加工してチーズにしてお店で販売すると、その価値は牛乳で売っているときの60倍にもなると言われています。あるいは蕎麦の話で言うと、北海道はまだまだ、玄蕎麦や蕎麦粉で売っていることが多く、それを長野の方が買って麺にしてお蕎麦屋さんで出している

るという場合が多いのですが、これからは「北海道の蕎麦」として、もっとお店を出していくような時代になると思います。

ビジネスの成功要因と課題

農村コミュニティビジネスの成功例は全国にあります。成功要因をみると、やはり明確なビジョンがある、マーケティング力がある、さらには積極性があり、よきアドバイザーがいる、広いネットワークを作っている、情報発信を上手にしている、というように成功の理由があると感じます。ただ一方で、地域に人口が減っているということもあって、人手がとにかく足りないという話を聞きます。もっとビジネスを広げたいのに、働いてくれる人が集まらない、後継者が育たない、さらに連携をしたいけれど上手くいかない。また、地域によっては、女性がなかなか外に出て行けないというような保守性といったことが課題に挙げられますが、先進地の成功事例を目にして耳にして、打破して欲しいと思います。

他分野との連携で新しいことにチャレンジ

地域の未来として、私はやはり農業と他の分野との連携ということがとても大切だと思うと思います。健康や美容を考えると、文化を考えるとというふうに、色々な視点で色々な業界の人と組むことで、もっと力を発揮できると思います。農業と他の分野との連携の大切さというのを、それぞれの地域で実践して欲しいと思います。

例えば、「農業×健康や美容」、「農業×文化」ということで、セミナーやイベントを開く、新製品を作っていくなど、色々な分野の人とアイデアを出し合うことで、今までにない新しい試みをするができると思います。

買って、食べて、飲んで農村を応援

皆さん、ぜひ農村へ出かけてください。そして買って食べて飲んで、地域を元気にして欲しいのです。というのは、北海道の美しい景観も、農家が元気だからこそ保たれているわけで、農業が力を失ってしまい、美しい農村景観がなくなると、観光

の分野でも人が集まらなくなるというふうに、ものすごく大きなつながりがあります。消費者としては是非「買って食べて飲んで、地域を元気にしていく」。そういう発想でこれからの買い物もして欲しいし、農家の人たちを応援して欲しいと願っています。

パネルディスカッション

広げよう！輝く女性がつくる魅力ある農村地域

シンポジウム後半は、北海道大学大学院農学研究院の小林准教授をコーディネーターにお迎えして、パネルディスカッションを行いました。パネリストには、北海道内で様々な取組を実践されている女性農業者お二人と、女性農業者の活躍推進を所掌する農林水産省北海道農政事務所も参加して、農業や農村地域の魅力あるものにしていくための課題や方向性をお話いただきました。

【パネリスト】

伊藤 まち子氏 北海道指導農業士協会監事

堀田 悠希氏 株式会社 at LOCAL 代表取締役

橋本 陽子氏 農林水産省北海道農政事務所生産経営産業部長

【コーディネーター】

小林 国之氏 北海道大学大学院農学研究院 准教授

■就農のきっかけと取組の紹介

小林——北大農学部的小林と申します。よろしくお願ひいたします。

パネルディスカッションのテーマは「広げよう！輝く女性がつくる魅力ある農村地域」です。

それでは早速、自己紹介を含めて、ご自身の活動についてご紹介をいただきたいと思います。

「女性が変われば地域が変わる」

伊藤——私は、短大卒業後農協に入り、農家の経営を見る係で当時300軒くらいの農家の経営を見させていただいたのですが、私なりにこうやったら儲かるんじゃないか、ああやったら儲かるのではないかというものを持っていました。その後、いわゆる負債農家に嫁いだことでそれを実践できるチャンスを得たわ



【コーディネーター】
小林 国之氏

江別生まれ。北海道大学大学院農学研究科を修了の後、助教を経て、2016年から現職。主著に『農協と加工資本ジャガイモをめぐる攻防』日本経済評論社、「ホクレン販売事業にみる経済連の組織機構と機能」『日中韓農協の脱グローバルイノベーション戦略』農文協、『総合農協のレーゾンデール』筑波書房、『北海道から農協改革を問う』筑波書房などがある。



【パネリスト】
橋本 陽子氏

農林水産省北海道農政事務所において、法人化や担い手育成など農業経営の改善及び安定に関する事務をつかさどる生産経営産業部を率いる。農政の立場から女性農業者の活躍を推進。



【パネリスト】
堀田 悠希氏

中札内村生まれ。JA中札内村職員を経て結婚を機に就農。女性農業者のキャリアを活かせる活動の場を創ることを目的に、2014年十勝若手女性農業者ネットワーク「農と暮らしの委員会」を設立。マルシェや食育イベント、勉強会を開催。2017年道の駅ピア21しほろのリニューアルに合わせ、株式会社 at LOCAL を設立。地域に根ざした食堂やカフェを運営。地場産品を使った加工品の商品開発を行う。



【パネリスト】
伊藤 まち子氏

苫前町生まれ。負債農家だった嫁入り先の農場を財務経理の経験を生かして立て直す。女性農業者は積極的に他地域と交流し、視野を広げ研鑽を積みレベルアップすることが地域活性化につながるとの思いで、2001年「留萌管内農村女性ネットワーク“オロロン”」を設立、地場産品の販売イベント等を開催。町議会議員としても活躍するなど、若手女性農業者のモデル的存在。

けですが、実際に色々なことをやってみて、なんとか経営を改善することができました。

その経験を平成10年に「酪農の意見・体験発表」ということで全国大会で発表したところ、農林水産省畜産局長賞をいただき、それをきっかけに普及センターが中心となって地域で女性の活躍する場を作ろうということになりました。簿記や経営面を勉強しているグループ、直販や加工をやっているグループなど、いろんなグループを一つのネットワークにして立ち上げたのが「留萌管内農村女性ネットワーク“オロロン”」で、「女性



が変われば地域が変わる」を motto に活動しており、現在14グループ84名で構成しています。農産品等の販売を通じた消費者との交流イベント「農業まるごとふれあい広場」は、今年で12年目を迎えています。

そのような活動をしてきたこともあり、平成22年、農山漁村男女共同参画優良活動表彰で農林水産大臣賞をいただきましたが、これからは北海道の女性もどんだんそういう賞を受賞できるように活躍していただきたいと思っています。

平成27年、統一地方選挙で町議として立候補し、当選させていただきました。今は農業の他にも福祉をはじめ女性の意見をいろいろな場面で言わせていただき、地域活性化のために頑張っているところです。

悔しさから始まったネットワークづくり、町民による町民が誇れるまちづくり

堀田——私は士幌町で農家に嫁いで5年目ですが、結婚する前までは「夢想農園」は市場と農協に全量出荷する超生産型農場でした。じゃがいも、ビート、小麦の他に、白カブと長芋を作っていて、北海道内に流通して

いる白カブの約3割は夢想農園の白カブと言われるほど大きな農場です。

もともと私は中札内村出身で、農協職員だったので、結婚して農家を1年間やってみて、すごく楽しかったのです。ただ、1年目の収穫のときに、「春先に家族やスタッフみんなで蒔いた野菜たち。私たちはいったい誰の口に入るものを作っているんだろう」ということが疑問に思われたのです。私もスタッフも家族も、その先の消費者、お客様の顔を見ながら農業をしたいという思いがありましたし、夢想農園のスタッフとして誇りを持って働いてもらうために、もっと働きやすい職場環境をというところで、個別販売をスタートさせ、東京、札幌圏の百貨店などに営業してまわって少しずつ販路を拡大し、今では農場の年間の総生産高の1割を占めるまでになりました。

他方で、夫婦二人で参加した商談会やビジネスセミナーでの名刺交換や商談の際には、あくまでも夫がメインで、なんとなく寂しい思いをしたことがあります。そんな悔しい思いをしている女性農業者は、もっとたくさんいるんじゃないか、私自身もっと農業を本気で語る仲間

が欲しいなと思って、平成26年、十勝全域の若手女性農業者ネットワーク「農と暮らしの委員会」(のーくら)を設立しました。子供たちと一緒にビートからビート糖蜜を作る食育の授業、あるいは自分たちの作った野菜を調理して食べられるマルシェなどを色々なところで行っていきます。

平成29年4月、士幌町の道の駅がリニューアルオープンしましたが、それに合わせて、平成28年に「株式会社 a t L O C A L」を立ち上げました。社員の半分は士幌町への移住者で、その他に地元の方々がパートやアルバイトで働いてくれていて、現在スタッフ総勢27名です。

これからの士幌町は観光産業にも力を入れようということでも元々の民間企業に経営を委託することにになり、私たちが会社を興したわけですが、それによって、町民の当事者意識が大きく向上したのではないかと思います。まだまだこれからですが、「町民がつくる、町民が誇れるまちづくり」の第一歩になればと思っています。

女性は農業振興に大きな役割

橋本——農業というところで、男性がトラクターに乗ってやっているとイメージではないでしょうか。実は女性が農業を支えているということが世の中にあまり知られていないのではないかとということで、女性をめぐむ状況をご紹介したいと思います。

女性は、農林水産業と地域の活性化においても重要な役割を果たしています。実は基幹的農業従事者、主に農業に従事している方の4割は女性です。まさに農作業を自らメインでやっている人の4割は女性ということ

です。なぜ女性が輝くととても良いのか。販売金額が大きい経営体や、多角化に取り組むような経営体は女性が経営方針の決定に参画している傾向が強いということも数字で出てきています。販売金額の規模が大きくなればなるほど、女性が参画している傾向が強いのです。

また、例えば農産物の加工や観光農園、輸出など、新しいことに取り組んでいるというところでも、女性がいる経営体の割合が高いのです。そして、政策金融公庫のデータによると、「女

性役員、管理職がいる経営は、いない経営と比べて収益力が向上する」ということが分かります。女性が経営にしっかりと関与していると儲けることができるという状況ですので、女性を経営に参加させていないのはもったいないことなんだということ、男性の方や地域の方にも是非ご理解いただきたいと思

います。一方で、農業委員や農協などの女性役員の比率は8%前後と、まだちょっと数が少ないかなという状況ですが、増えてきています。以前は、1%に満たない低い数字でしたので、これも伸びてきているんだとは思っています。ただ、伸びはしているものの、北海道は全国よりも実は相当低い。ですから、北海道は農業がしっかりとっている分、意外とまだ男性社会なのかなと思

っているところもあります。先日、酪農女性が集まる会に出席した際に、ある酪農女性の方から「モチベーション維持のためにこういうところでお話できるのはとっても良いことですよね。でも、本当に問題なのは、こういう場にも出てこれない人だと思

います。課題じゃないでしょうか」と言われました。

本当に女性が活躍するということは、女性が前に出ていくということも大事ですけれども、旦那さまやご家族、また地域でそれを理解して、応援してもら

■取組に活きる個性

小林——伊藤さん、堀田さんのお二人が活動されている中で、例えば私は自分のこういう個性が今の活動にすごく活かされているのではないかと、ご紹介いただければと思います。

外に出て勉強し何かを得る

伊藤——元々、簿記関係など全く分かりませんでした。農協に入ったことで貸借対照表の見方も分かるようになりました。それが経営という面に活かされていると思います。ですから、若い女性には「今は右の耳から左の耳に抜けるような言葉であっても、とりあえず聞いておきなさい、勉強会があったら出て

聞いておきなさい。そうやって頭の引き出しのどこかに入れておけば、いつか出てくることがあるよ」と言っています。

私自身、出かけていくことも好きでしたので、勉強会があると出て、そこでいろいろ教えていただく。それは今すぐ使わな

いことでも、経営の中のどこかで役立つのです。出て行くからには自分の仕事をきっちりやって、その代わりに何かを得てくるという気持ちも持っています。

飲食業で培ったもてなしの心と商売勘

堀田——実家が中札内村で焼肉屋さんをやっていたので、小さい頃から食べ物って人様を幸せにできる職業なんだと思



「いいか、お前は商売人になるんだぞ」と、父から商売道の英才教育を受けていたこと。飲食業は日々お金が回る商売なので、農家になって個別販売で売上目標を達成したいと思ったときに「1日当たりこれぐらい売上げがあれば年間でこれぐらいはいくなく」っていうことを考えられる頭があったということが、私の中の個性なのかなと思います。

■ネットワーク仲間づくりに当たって

小林——堀田さんも仲間づくりをしなきゃいけないということ

で十勝の女性のネットワークで作られていると思うのですが、その中で気を付けていることや、仲間と一緒にどういうことをやりたいと思っているのか、今の仕事の中でどういう勉強が必要だと思っているかなどについて教えてください。

また、伊藤さんはまさに留萌管内全域の、女性のネットワーク化の仕掛け人、発案者ですが、長い間、取組をされてきて、昔と今の状況の変化だとか、今はどういった勉強なり仲間づくりが必要かということについて、お考えを聞かせていただきたいと思えます。

興味を引かせる話題提供

堀田——今も農協の「フレッシュユミズ」という団体に入って地域の方々とお付き合いさせていただいているのですが、そこでは有志の団体を作って経営の勉強をしよう、あるいは食育の勉強会をしようといきなり提案しないようにしています。ゆっくり一人一人と話している中で興味ありそうだなと思ったら、「食育の勉強会があるけど、あなた興味持ってたよな、なかった？」とか、「あなた前職、何々っていう職業だったよね、こういう勉強会

あるけど行く？」というふうには個別に話をするようにしています。

十勝の仲間で作ったのーくらに必要だなと感じていること、やりたいこと、勉強したいことは、企画段階からメンバー全員で情報を共有するようにしています。そしてその内容が決まったら、ではそれに合った講師を見つけてみましょう、というようにメンバーがとても積極的に関わって合っています。

「継続は力なり」高齢化でも続ける意識

伊藤——ネットワークを立ち上げたときには、行政のバックアップもあったし、何となくそういう気分にはさせられたというのもあったのですが、当時は私くらいの世代の人もたくさんいたんです。でも、だんだん高齢化してきて一人抜け、二人抜けというところで、会員数が減ってきている。これが各地で非常に問題になっていて、それを食い止めることは難しいかと思えますが、如何に若い女性に入ってもらって継続してもらうかが大事だと思います。

そして、高齢だ高齢だって言われる人たちも、他の地域を見

て、自分たちはまだまだ高齢ではないんだということを認識して欲しい。私も、先ほど大臣賞をいただいたと言いましたけれども、その表彰式で東京に行ったら、80歳になる方が「大臣賞を貰ったから冥土の土産に持つていく」という話ではないのです。「次の世代に私の持っている技術を渡していかなきゃいけない」という言葉があったのです。それを聞いたときに私は、「ああ、そういうことなんだ」と、ビックリしたのと同時に、すごく刺激を受けました。

今、私がいるネットワークも、なかなか大変な状況になってきていますが、やはり一人ではできないことも、仲間の力というものがあるに強いと思うのです。ですから、「継続は力なり」ということで何とか継続してやっていきたいというのが本音です。

■ネットワーク形成に当たっての課題～世代間の隔たり～

小林——昨今は、若い女性の農業グループが結構出てきているのですが、その一方で、伊藤さんがやっておられる活動にはあまり若い人が入ってこないというところについて、堀田さんの目

から見て、それはどうしてだと思えますか。

それぞれの世代でやりたいことを見つけることが大事

堀田——そうあるべきじゃないかなと思います。私たちも、もちろんのーくらのメンバーが増えることは良いけれども、もっと大事なことは私たちよりも若い20歳代前半とか、そういう世代が勉強会グループを作っていくことの方が大事だと思っています。そういう方たちが40歳になっても50歳になっても60歳になっても、「まだ元気だね、何かやるか！炊き出しでもやるか！」というような仲間づくりの方が大事なのではないかなと思います。

小林——今の意見を聞いて伊藤さんはどう思われますか。

世代間の連携が求められるが難しさもある

伊藤——そういう意欲的な人がどんどん広がっていけば、良いことなんですよね。全道の農業女子ネットワークとして「はらぺ娘」を結成する際に私も講演させていただきましたが、本当

に若い子もいます。ただそこはやはり、年齢の差や区別もなくネットワークを作って如何に地域で活動していけるかということが、次に求められることではないかなと思います。世代間で上手く連携してやっていくということが、少し難しい時代になってきているのかなと感じています。

小林——それぞれのやりたいことと、それは別に地域でやらなきゃいけないこと、というように課題の方向性が違ってくる、一緒にやるのもなかなか難しくなってくるということはあるのかもしれない。橋本さん、今のお話を聞いて、農政として支援できることが何かありそうじゃないですか。

人生の転機に自然につながることを期待

橋本——本当によく聞く課題だなと感じています。ただ、私は必ずしも若い方と年配の方が断絶しているというふうには感じていなくて、特に女性は、若い人と、70歳以上の方が交流しているような姿も結構見えています。若い人は自分が結婚や出産などといった課題に直面したとき

に、やはり先輩の話を聞きたいという思いも結構あって、一回ちよつと距離があっても、またつながっていくことはできるのではないかも感じています。今、いろんなネットワークが出来てきているのはとても良いことで、時期が経てば、それが有機的につながったりということも期待できるのではないかと思います。

女性が活躍するための環境整備

小林——伊藤さんのように大臣賞を獲得とか、堀田さんのように取組がテレビで放映されると

か、新聞さんのように行政から任命や認定がある、というように取組が広く認知されるということは必要なことだと思われませんか。また、こういう支援があれば、もっとやり易くなるんじゃないかということがあればお聞かせください。

地域全体で女性が力を付けた上で登用されることがベスト

伊藤——やはり女性の登用率を上げることが先決だと思うのですが、登用率を上げるためにただ当てはめれば良いということではなくて、女性が力を付けた上で、女性の登用率が上がっていくことがベストであると思うんです。そこで行政などがいるんな形で若手の人たちを支援し、私たち年配者がサポートしてあげるといった形をうまく作れるシステムがあったらいいなと思います。そして、農業者に限らず、地域全体でということを入れ、商工、消費者、行政なども交わって女性の意見を入れながら、登用率をアップしていく場面があったらいいなと思います。



**それぞれの立場でできることを
話す情報共有の場が必要**

■女性側の活躍の意識

堀田——行政との関わり、バックアップということでは、のーくらを立ち上げてから女性だからできることというのを一生懸命考えてきたのですが、今となっては、それよりも女性、男性それぞれができることを一生懸命やるのが進歩なのかなと思っっています。のーくらをやることも、行政の方がバックアップしてくれましたが、そのときに私たちの思いを伝えるだけではなくて、行政ができることとできないことを、ちゃんと聞かなければいけないんだなというのをすごく学びました。

道の駅の運営も同じで、民間は民間のスピード感、行政は行政のスピード感があって、それで対立していたら全然進んでいかないのです、行政、農協、私たち民間の会社、それと地域おこし協力隊で1週間に1回会って情報共有する場を作ってもらっています。

そうすることで仕事がやりやすくなつたし、もつと行政の方に頼れるようになったなと思います。だから、情報を共有する場が必要なのではないかと思えます。

**地域のロールモデルをつくって
農業に生きがいを感じてもらいたい**

小林——女性の社会進出ということと登用という話になったときに、男側が「やってくれ」と言っても女性が断るという例もあって、「女性側にも問題がある」という言い方をする人も多いと思います。そういうことについて、一生懸命に活動している立場として、周りの女性たちにもこういう言葉をかけたいと思いませんか。

■「声かけ」で外に出やすい環境をつくる

伊藤——私が立ち上げた近隣の酪農女性の会「モーモーみるく倶楽部」には、他の土地から入ってくる若い女性も多いのですが、その方々には、倶楽部の活動に参画してもらうために、「一緒に参画しよう」とどんだん声をかけて外に出やすい環境を作ることとを心掛けています。そういうことから始めていけば、いざそれは意識が育ち、役員への就任を求められることに対して、「ああ、いいですよ」という感じになるのではないかなと思えます。

■魅力ある農村地域のために

小林——それでは最後に、伊藤

さん、堀田さんのお二人から、新開さんのお話の中で「ここがすごかったな」というのを聞きしつづ、これからの地域づくりに向かって「私はこういう思いで、今後こういうことをやっていきたいと思っっている」という、いわば決意表明をお聞かせいただき、橋本さんにも一言いただきたいと思います。

■地域づくりを見据えた担い手育成

伊藤——新開さんのお話を聞いていて、私たちの大先輩が苦労してやってこられたということ、そして基本にあるとも言える「何をすることもお金を貯めなきゃダメだ」ということを一番強く感じました。私たち指導農業者は担い手育成をしているんですが、新規就農にしても若手を育てるにしても、お金は関係してきますのでやはりそこが基本だと。

今後に向けてですが、申し上げたとおり、指導農業者は将来に向かって担い手を育成していかねばなりません。しかし、担い手育成と言っても、農業者を育成するだけではなくて、私たちの使命は「担い手を育成しながら、地域をどう活かしてい

くか、どう活性化していくか」
だと思のです。それは私たち
だけではできないことなので、
若い方の意見を聞き、そして先
輩たちのご指導をいただきなが
らやっていきたい。

私もたまたま町議という立場
をいただいています。地域活性
化のためにはやはりそこをフル
活用してやっていきたいと思っ
ています。

地域での役割を考えながら自分 にできることに取り組む

堀田——新開さんの「私の限り
ある時間で子供たちに教育を、
食育をし続けたい」というお話
は農家の本質だし、私自身も一
生それに向き合っていていかな
いけないんだろなあと痛感し
ました。

私はまもなく30歳になりま
すが、農家にきてまだ5年目だ
し、今実際に手がけていること
が正しいのか正しくないのかも
分からないし、もちろん結果も
なくて、どっちの方向に行つた
らいいのか正直分からなくなる
ときがあります。でも、今の私
がやらなきゃいけないことは、
こうしてもがいていることを、
たくさんの人に聞いてもらつた
り、たくさんの方の農家さんと情報

共有したりすること。そうす
ること自体が今の私に課せられて
いるミッションなのかなと思っ
ています。

3年後、5年後、10年後にど
ういう農業を目指していくのか、
この地域で私たちがどういう農
家であることが理想なのかとい
うことに向き合いながら、「夢想
農園」、「atLOCAL」
のそれぞれでできることを一つ
一つ着実にこなせるような農業
者でありたいと思っています。

女性の輝きが農業を明るく、そ して地域を元気にする

橋本——実は、農業を語るとき
は高齢化のことや後継者がいな
いことなど、少し暗いイメージ
で語られることが多いけれど、
残念だなと思うのですけれど、
女性のネットワークの集まりに出
ると、あまりの元気に圧倒され
る感じで、全然暗くなんか
ないというふうに思っています。

10年程前に、女性農家にお話
を聞いたときから忘れられない
ことがあります。それは「女性
が、お母さんが生き生きと輝い
ている経営体っていうのは絶対
に後継者が自然と育っていくん
だよ。だから女性が輝いている
ところは経営体も元気になるし、

その地域も元気になるんだよ」
というお話です。まさにそれを
実感しながらこの10年を過ご
してきたなという感じがしてい
ます。

農林水産省でも是非、農家に
儲けていただきたいということ
で、例えば、平成28年の11月に
「農業競争力強化プログラム」
を決めて、色々な施策を打ち出
しています。

男性、女性ともに輝けるよう
な農業を目指して、我々もしつ
かり応援していきたいと思いま
すので、引き続き皆さまの活躍
をお願いしたいと思います。